子の「受け容れ」をめぐる家族実践
――トランスジェンダー男性の子をもつ夫婦の事例を通して――

勝又栄政（立命館大学大学院）

研究の背景・目的

本研究の目的は、トランスジェンダー（以下より TG）の子をもつ親が、子を「受け容れる」というプロセスをめぐり、どのような家族実践を行い／行わず、家族を継続させているのかを、同一家庭の夫婦の実践とその相互作用に着目し、明らかにすることである。近年、TG 当事者の生きやすさには家族、特に親の「受け容れ」が重要であることが指摘されている。だが日本において、TG の子をもつ親の研究は事例数が限られており（石井 2018; 勝又 2024 など）、その実態は未だ不明瞭である。先行研究の結果を確認すると、父母によって子の受け容れ過程が異なっており、そこでは、父・母それぞれに内面化されている、既存のジェンダー・セクシュアリティ規範や性役割の影響があることが示唆されている。しかし、実際の家族内部で引き起こされている子の「受け容れ」は、親個人のみでなされているのだろうか。夫婦のいる家庭内であれば、多くは父母それぞれの存在を完全に切り分けることは難しく、実際には相互のバランスの中で、子の受け容れ／家族関係の継続がなされているはずである。そこで本研究では、TG の子をもつ家庭の夫婦に焦点を当て、子の「受け容れ」が夫婦間のどのようなバランスの中で行われているのかを、「家族実践」（Morgan 2011=2017）の観点から分析する。

研究対象者・方法

対象者は TG 男性の子をもつ夫婦 3 組（シスジェンダー・ヘテロの父母 3 名ずつ）である。調査方法は生活史調査（半構造化）を採用した。また、より家族内部の実践に焦点を当てる、かつ、子のジェンダー差の影響を考慮し、「自助グループに参加経験のない」、「TG 男性の子」をもつ親に対象者を限定した。

調査結果・考察

本報告では、特に TG を受け容れる際によく用いられる「幼少期から見られた子の言動」について、「凝視」という家族実践を切り口に父母の実践の差異とその効果を検討する。

例えば、TG 男性の子が「幼少期にスカートよりもズボンを好んで履いていた」という場面について、母親は「凝視」という実践を通して「活発な子だったから（スカート）鬱陶しいのかなと思った」と、子の状況を踏まえ、ズボンの存在を「子が活動しやすい合理的な理由」として位置づけていた。つまり、母親の実践は、子の言動を「我が子独自の特性」としての把握を促し、その結果、母親はズボンを好むのは「子の特性」であって「男である証拠ではない＝女」と解釈し、子をすぐに受け容れることが難しい様子が見受けられた。他方父親は、母親に比べ「凝視」実践の形跡が薄く、「子は昔からズボンが好きだった＝男」と、子の言動とジェンダー規範とを結びつけ子を男性であると解釈し、子を受け容れやすい様子が見られた。このような父親の姿は母親からすると楽観的に映り怒りの対象となる一方で、家庭全体としては、子の隔絶を防ぐ実践ともなる様子が浮かび上がった。

以上から、TG の子の「受け容れ」の場面においては、母親のように家族実践をすることが逆に家族の継続を困難にさせ、一見すると家族実践的でない父親の実践が、家庭全体ではむしろ家族継続を促す実践となる可能性があることが示唆された。だが「凝視」実践は長期的な時間軸が加わった場合に意義の転回を見せ、母親が時間をかけて子の意向・背景に沿う深い理解をし子との信頼関係が強化されると、安定的な家族継続へ繋がる実践となり、逆に父子は信頼関係が構築する機会がなく疎遠になる様子が示された。本報告では、以上のような家族実践がもたらす短期的／長期的な効果と、家庭内における「実践のない実践」の可能性について考察を深めていく。

【参考文献】①石井由香理, 2018『トランスジェンダーと現代社会――多様化する性とあいまいな自己像をもつ人たちの生活世界』明石書店. ②勝又栄政, 2024「トランスジェンダーの子を持つ父親の『受け容れ』をめぐる経験」『家族社会学研究』36(1): 7-20. ③Morgan, David. H. J., 2011, Rethinking Family Practices, Palgrave Macmillan（＝野々山久也・片岡佳美訳, 2017,『家族実践の社会学――標準モデルの幻想から日常生活の現実へ』北大路書房）.

（キーワード：トランスジェンダー、親子関係、家族実践）